二〇二一年七月三一日

住み古りし縁に二人の団扇かな　よう子
青空へ泡のはじけるレモネード　む　べ
半パンにアロハシャツ着て喜寿祝ふ　凡　士
海風の通ふホームの涼しさよ　わかば
背ナ広き息子の浴衣姿かな　更　紗
大空へ投げ入れしごと月涼し　こすもす
糸蜻蛉水輪残して翔ちにけり　素　秀
ぬけがらもまたなきがらも蝉の森　せいじ
胸張りて軍鶏炎天に高鳴けり　素　秀
造り滝虹を生みたる茶庭かな　わかば
海の日の子に握りたる塩むすび　更　紗
帰るさの吾の背を焼く大西日　はく子
朝涼の町一巡りウオーキング　菜　々
合歓の花吾の余生も第二章　宏　虎

毎週句会秀句・みのる選・二〇二一年八月一日